

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

辺境から考える：
知識共有の手段としてのエクスペディション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都大学人文科学研究所 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008504

辺境から考える

——知識共有の手段としてのエクスペディション

ただいま、菊地暁さんから、京大人類学の「もうひとつのオリジン」について話題提供がありました。人文研の社会人類学班を創設した今西錦司と、「もうひとつのオリジン」に深く関わった水野清二には、共通点があります。それは、複数研究者の共同によるフィールド調査を重視したという点です。

文化・社会人類学や生態人類学では、フィールド調査で得られた資料が欠かせません。これは、実験データや文献資料にもとづく諸科学との大きな違いです。フィールド調査の重要性は、人文研で社会人類学部門が創設された頃、すでに常識となっていました。しかし、当時はさまざまな理由で、研究者個人によるフィールド調査を海外でおこなうことはむずかしかった。そこで、多数の研究者に呼びかけてひとつのグループを作って、日本政府や渡航先政府と交渉をおこなう必要がありました。

今日の話では、こうしたグループ形態の海外調査をエクスペディションと呼んでおきたいと思います。海外調査がエクスペディションというかたちをとらざるを得なかった当時の状況を、今日はふり返ってお話いたします。それが今日の論点のひとつです。

しかしそのいっぽうで、エクスペディションという調査形態は、しかたなくとられたわけでもありません。エクスペディションにおける協働は、共同研究における成果共有とパラレルに考えられていたふしがあります。共同研究が資料分析プロセスの共有だとすれ

ば、エクスペディションは資料獲得プロセスの共有だというわけです。共同研究については、後の河合香史さんが詳しくふれられます。わたしの話では、エクスペディションの概要を中心に、それが共同研究とのつながりで考えられていたようすをご紹介しますと思います。これが今日の論点のふたつめです。

人文研のエクスペディション

人文研におけるエクスペディションの始まりは、菊地さんのご紹介にあったように、水野清二の中国調査に求められます。彼は、一九三八年から四四年にかけて七回にわたって、人文研所員とともにエクスペディションを組織しました。その調査のなかでは、雲岡石仏を実測するなど、現在からみてもユニークな資料収集をおこなっています。

こうした東洋史学者や文化史学者の活動とほぼ同じ頃、人文研の社会人類学部門を創設することになる人たちも、エクスペディションを基礎とした学術活動を始めていました。京都探検地理学会が発足するのは、一九三九年です。その幹事六名のなかには、水野清二も含まれています。この会では、月一回の例会をとおして、さまざまなフィールド調査の成果が披露されました。それと同時に、今西錦司が隊長となつて、学部生レベルの研究者たちを率いてエクスペディションに出かけています。学部の指導教官から離れたところで実地教育がおこなわれていた

いたたく
飯田 卓
国立民族学博物館准教授

わけで、その点でも当時はめずらしかったといえましょう。一九四二年にはボナペ島を調査し、一九四二年には北部大興安嶺の探査をおこなっています。ふたつの調査に参加した学部生のひとりに、のちに人文研の社会人類学を担う梅棹忠夫がおりました（京都大学総合博物館編二〇〇二）。

一九四〇年代後半と一九五〇年代前半は、戦争とそれに続く占領統治のため、海外エクスペディションは組織されなくなります。国内のフィールド調査がおこなわれてはいましたが、大学自体が改革のうねりのなかにはありましたが、学術全般が停滞してしましたのなかつた時期です。

一九五〇年代後半以降は、人文研からたて続けにエクスペディションが派遣されます。研究所の五〇年史（京都大学人文科学研究所編一九七九、二八二）や『要覧』（京都大学人文科学研究所編一九九三、八二）には、戦後のエクスペディションとして、次の五つが列挙されています。①カラコラム・ヒンズブークシ学術探検（一九五五年）、②イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査（一九五九〜六八年）、③アフリカ類人猿学術調査（一九六〇〜六八年）、④ヨーロッパ学術調査（一九六七〜七二年）、⑤ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究（一九七七〜八二年）、などです（注1）。

②から⑤までは、人文研の教授が隊長となつてい



ましたので、人文研のエクスペディションと考えてさしつかえありません。しかし①は、京大農学部の本原均が隊長をつとめていました。それにもかかわらず、この調査を人文研のエクスペディションに含めた理由について、『五〇年』は記していません。これには、以下のような理由があります。

まず、隊員のなかには、人文研所員が少なくありませんでした。日本人隊員五名のうち、新聞記者や映画カメラマンを除くと二名、そのうちの今西錦司、岩村忍、岡崎敬（年齢順）の三名が人文研所員でした。また、梅棹忠夫は、当時大阪市立大学の助教授でしたが、人文研講師の資格で隊に参加しています。

また第二に、この探検隊の派遣母体としてカラコラム・ヒンズークシ委員会が組織されましたが、その実行委員長に人文研所長だった貝塚茂樹が就いています。委員長は学長の滝川幸辰でした。おそらく、広報や募金活動など事前準備の責任を、貝塚は担っていたのだと思われれます。

また第三に、この隊の事務局は人文研に置かれ、装備の送り出しも人文研からおこなわれました。このときのように、中尾佐助（九五六）や梅棹忠夫（九九〇）が詳しく書いています。おそらく、戦前からエクスペディションを意識的にこなってきた今西錦司の采配で、出発準備の体制が整えられたのだでしょう。

なお、カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は、人文研のエクスペディションを担う二つのグループの共同事業としても、意義深いものでした。二つのグループとは、のちにアフリカ学術調査をおこなう今西・梅棹らの社会人類学グループと、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査をおこなう岩村・岡崎らの東洋史グループです。

なぜエクスペディションか

昭和三〇年代の二〇年間は、エクスペディションという調査形式が日本でもっともさかんにおこなわれた時期でした（飯田二〇〇七、二〇一〇）。戦後最初の本格的な海外調査といわれるカラコラム・ヒンズークシ学術探検は、一九五五（昭和三〇）年です。また、一九六三（昭和三八）年になると、海外業務渡航の制限が緩和されると同時に、文部省が制度的に海外調査を認めるようになります。この二つの年によって区切られる時期には、研究者がマスメディアと積極的に連携しながらエクスペディションを組織し、学術をいわば大衆化していきました。それには次のような背景があります。

まず、海外渡航費用が高額にのぼったということがあげられます。当時は、二ドルが三六〇円に固定されていた時代です。個人の資金で海外渡航をおこなうのは困難でした。そこで、エクスペディションの派遣を企業などから支援してもらう必要があります。具体的には、著名な学者を隊長に据えて、学術的な意義も掲げながら、大学に対して寄付をしてもらう。そしてそのために、新聞社の後援を受けたり、エクスペディションの映画を一般映画館で上映させたりする。いわば、社会的認知を得るために、あらゆる仕掛けがほどこされたのです。

また、寄付を集めるためだけでなく、外貨使用許可のためにも、社会的認知が必要でした。当時、日本から外貨を持ち出すためには、大蔵省に「対外支払許可申請書」を提出して、渡航目的の審査を受ける必要がありました。そして、そこで許可された額を上限として、外貨使用が許されたのです。審査では、渡航目的の社会的重要性が検討されましたから、許可を得るために、著名人やマスメディア

の協力がおおいに役立ったわけですね。

こうした状況は、一九六三（昭和三八）年に変化します。業務渡航については、この年に外貨割り当ての審査がなくなり、個人旅行については、翌六四年に自由になります。この動きにあわせて、一九六三年には、文部省が科学研究費補助金に海外学術調査というカテゴリを設置して、海外調査を積極的に支援するようになります。つまり、企業の寄付に頼る必要もなくなつたわけです。このため、海外調査に対しては社会的認知でなく学術的意義が問われるようになります。また、組織的な寄付集めが不要になると、調査の個人化も進みます。このような理由のために、昭和四〇年代以降は、エクスペディションと個人調査の区別が次第に曖昧になっていきます。

フィールド研究の振興

このように、昭和三〇年代当時、海外調査はエクスペディションというかたちをとらざるをえませんでした。しかし、当時の関係者が書いたものを読めば、やむをえずそのようにしたとは思えません。むしろ、エクスペディションという調査形態に積極的な意味を見いだし、その形態を必要としない国内調査にも拡大せよというような、そんな意気込みが感じられます。フィールド研究に関わる九つの学会が代表者を選出して九学会連合対馬調査を実現するのは、一九五〇（昭和二五）年のことで、カラコラム・ヒンズークシ学術探検より五年も前です。しかしその後、能登調査（一九五二～五三年）、奄美大島調査（一九五五～五六年）、佐渡調査（一九五九～六〇年）、下北調査（一九六三～六四年）、利根川調査（一九六六～六八年）、沖繩調査（一九七〇～七三年）、ふたたび奄美調査（一九七五～七七年）と回を重ねるなかで、海外エクスペディションの考えかたは国内調査にも影



響していきました。

エクスペディションという方法は、フィールド研究によつて得られる資料の重要性を、学界に広く認めさせることになりました。それまで文献研究をしていた学会の重鎮が、エクスペディションに深く関わり、その学会ではフィールド研究が否応なく認知されるようになります。文化人類学の例でいえば、神話学者だった松本信廣が、日本民族学協会の東南アジア種族文化総合調査団(第一次、一九五七年)を率いたようなケースです。九学会連合に参加した学会では、多かれ少なかれ、フィールド派の力が増していったように思います。

文献研究や実験室での研究に対抗して、フィールド研究を盛りたてようという意図は、人文研の社会人類学部門に関わる人たちが当初からもっていたものでした。たとえば、今西錦司はこのようなことを書いています。

帰国の途すがら私は神戸付近の惨憺たる戦災のあとをみて、これでは復興も容易ではあるまいと思つた。……それとともにこの調子では、これから金のかかる実験的な仕事を始めてもどうしてアメリカに勝てるはずがない。そうとすれば親譲りの身体を動かし、あとは鉛筆とノートと望遠鏡さえあればできるフィールド(野外)の仕事で、太刀打ちする以外にはない。……われわれのようにきたない身なりをしてフィールドを駆けまわり、望遠鏡をのぞいているのは研究でないかのように取り扱われがちであったが、そろそろわれわれの仕事もその真価の問われるときがきたのではないか、と思つたのである。(今西一九七五、四六五―四六六)

ここでは実験室での研究に対抗する意識がうかがえますが、文献研究に対しても、梅棹忠夫が次のように書いています。

日本学術の伝統的な傾向として、むしろ実証よりは思索、現象の観察帰納よりは原理よりの演繹的説明という傾きがより強力であったことは否めない所であらう。……実は日本探検が今まであまり振わなかつたというのも、一つは探検がその生命とする実証的精神が、日本においてなお確固たる伝統を樹立していなかつたという事情に負う所多いのである。(梅棹一九四三、一一五)

ここで梅棹が「探検」と呼んでいるのは、今日の発表でいうエクスペディションのことだと考えてほましがありません。エクスペディションというヨーロッパの概念はさまざまな日本語で訳されますが、探検はもつとも一般的な訳語です。

知識共有の手段

昭和三〇年代当時において、エクスペディションという方法論がもつていたもうひとつの意義は、知識共有の手段としての意義でした。冒頭で述べましたように、複数の研究者がエクスペディションに参加して資料獲得のプロセスを共有し、帰国してから共同研究会で資料分析のプロセスを共有する、そうした連年の知識共有プロセスが、あたらしい知見を生みだすと考えられていたのです(注2)。

このことに関して、梅棹は先述した京都探検地理学会に関わつた同世代研究者の方法論を紹介する叢書の刊行趣旨のなかで、次のように書いています。

経験の継承や知識の集積は、集団的におこなわなければならない。グループをくんで協働の課題を追う以上は、おたがいの経験がちくばくであつ

てはまずい。グループの知識は、すくなくとも標準化されている必要があるのである。われわれがここに、わざわざ刊行というマス・コミュニケーションをえらんだのは、ひとつにはそういう理由があったのである。／＼逆にいえば、この冊子は、グループのためのものである。自然史学会中の青年有志と名のる人たちのためのものである。

(中略)

学問の世界にも偏狭なるコンバートメンタリズムが根をはる。専門をこえた協力が必要であると口ではいけれども、じつさいに協力をスムーズにするための具体的手段が、どれだけでもふうされたであろうか。また、学問の世界にも軽薄なるジャーナリズムとサロン談義が横行する。口さきと指さきで学問をしようとするのであるか。暖房や冷房のある場所をはなれよう。素朴なる野外において、なまの自然にまなぶすべを身につけるべきである。質実剛健は、いまなお科学の母である。／＼もう一度伝統ということばをくりかえすならば、専門をこえた共同研究と、豪放なる野外作業のふたつこそは、自然史学会(注3)の伝統であった。このような刊行物のくわだて自身が、まさにおなじ伝統の精神の産物にちがいない。(梅棹一九九二、四九五―四九六)

ここでは、野外調査つまりフィールド調査の方法論を意識的に標準化し、共有することによって、偏狭な専門家意識をうち破ることが目ざされています。フィールド調査と共同研究はほんらいまったく別のいとなみですが、エクスペディションという研究体制をとることによって、ふたつが統合されると考えられます。この文章には、エクスペディションをつうじて知の共有を実現しようという、強い意思が感じられます。

のちに『知的生産の技術』を著し、情報集積の装置として民族学博物館を構想した梅棹の、知についての考えかたがここにはよくあらわれています。

梅棹以外の所員についてはどうだったでしょうか。梅棹と同じく理系の出身で、ロールシャッハ心理テストに関する業績で人文研に着任した藤岡喜愛は、次のように書いています。

私は生物誌研究会(略称F・F)の事務をつとめるようになってから、もう数年になる。また所内の共同研究に参加し、農村調査に参加しているんな分野に接する機会にめぐまれた。気がついてみれば、共同研究の必要はすでにながらく唱えられているが、それが京都ではもう育ちはじめているのだ。体験を通してつくづく思うのは、探検計画などを含めて、共同研究が育つには、京都はまったくよい環境にめぐまれているということである。(藤岡一九五七、一九)

生物誌研究会(F・F: Fauna and Flora Society)というのは、カラコラム・ヒンズークシ学術探検が京都大学の事業となる以前、探検計画を立案した母体です。探検隊の事務局が人文研に置かれた大きな理由のひとつは、F・Fの留守番役として藤岡が人文研にいたためでしょう。この文章で藤岡は、エクスペディション(探検)を共同研究の形態としてとらえています。この文章に続けて、彼は次のようにも書いています。

私自身は共同研究の成熟を必要だとしているので、現状では「人文研の共同研究に対して」かなり無理な注文もつてきたくなっている。／＼第二に事務局の必要性がもつと正面から理解されねばならない。現在では事務局は一種の必要悪「いや

され仕事」の意か」にすぎない。F・Fでは、探検おくり出しという事業がともなうため、まずもつて事務局がつくらねざるを得なかつた。また事務局もある程度はとのえざるを得なかつた。しかし一般の共同研究ではまだ充分でないように思われる。(藤岡一九五七、一九)

ここでも藤岡は、エクスペディションを共同研究会の「形態としてとらえ、事務局が円滑に機能する点で先進的だととらえています。おそらく、この考えは梅棹にも共通していたのでしよう。のちに梅棹が組織する共同研究の事務局は、電話や郵便で連絡をとったり、研究会の発言を録音して文字記録に起こしたりして、メンバー間のコミュニケーションを積極的にはかつていたといえます(梅棹一九九三)。

エクスペディションの将来

次の梅棹忠夫の文章は、一九七〇年前後の状況を示したものです。この頃、彼は、一九六九年に始まった「文明の比較社会人類学的研究」と、アフリカ学術調査を後継する「アフリカ社会の研究」、さらに「理論人類学の研究」という三つの共同研究を運営していました。その人数はのべ五〇人ほどのほりましたが、研究会ひとつ分の予算だけを配分してもらうことで、所内の批判をかわしたそうです。

このような「三つの研究班にまたがる」集団は、いわゆる組織とはいえない。……この研究班は、班員として研究所の事務局に登録されているというだけで、ほかになんの拘束もない。いわば不定形の集団である。

(中略)

直接にわたしの指揮下にあるのは助手一名と秘書たちだけである。あとはすべてわたしの指

揮命令系統に属さない、いわば盟友というにちかかった。／わたしはこの集団を一種のバルチザンのようなものだとかんがえていた。命令一下、全軍団が一体となつてうごくというのではない。戦闘単位は個人である。個人がばらばらにたたかっている。しかし攻撃目標についての共通の了解は成立している。そしておたがいのコミニケーションは確保されている。(梅棹一九九三、九八)

この文章を読むと、梅棹のいう組織的行動は、軍隊のように規律が厳しいものではなかったことがわかります。初期の頃からそうだったかどうかはわかりません。というのも、彼は同じ時期、エクスペディションの編成原理についての考えかたを変えているからです。彼は、同じグループのエクスペディションで鍛えられたたき上げを中心メンバーに据える「養成主義」を理想としていたのですが(土倉・梅棹一九四三)、一九七〇年代の座談会では、エクスペディションでの協働を経験していない専門家を集めた「合成主義」でもうまくいく時代になってきたと言っています(江上ほか一九七二)。規律も以前は厳格に守ることを求めているが、この時代にはゆるやかなものでかまわないと考えていた可能性があります。

このことは、社会をとりまく大きな変化とも関係しているでしょう。すでに述べたように、一九六三年以降はエクスペディションと個人調査の区別がなくなっただけでなく、海外旅行が自由化されたため日本人の海外での活動も多様化しました。そうしたなかで、社会的認知を得るための集団化や、組織的行動の必要性は低くなっていくのです。

しかし、エクスペディションをたんなる組織的行動とみるのではなく、知識共有の手段とみるならば、現代でもまだまだ可能性があるのでないかとわた

しは考えます。学術調査のありかたが多様化するなかで、エクスペディションという調査形態は必要ではなくなったけれど、テーマによってはまだその効用を失っていないのではないのでしょうか。

たとえば、科学研究費補助金研究のテーマを見わたしても、地域研究の名のもとに領域横断的な計画が百出しています。また、大学の学部改革のようすをみても、既成分野(Organ)より分野横断型研究(Studies)が幅をきかせているように思えます。さらに、大学附置研究所が全国共同利用の役割を担うことにより、さまざまな大学が数多くの共同研究をおこなうようになりました。このように、個の担う知とは別にグループの知が幅をきかせている現状をふまえれば、知識共有の手段であるエクスペディションを共同研究の基礎とするやりかたも、まだまだ可能性を秘めているように思われます。

注

①は、「人文科学研究所五〇年」のなかで「カラム・ヒンズーク学術調査」と記されているが、本文では調査隊の正式名称を記した(木原編一九五六)。また、「五〇年」は②の終了年度を一九六五年、③のそれを一九六六年としているが、ここでは手元の報告書で確認できるものも遅い年代を記した(水野編一九七〇、今西・梅棹編一九六八)。③について、「五〇年」はたんに「アフリカ類人猿学術調査」と表記しているが、本文では一九六三年の名称変更もわかるようにした。また、一九七五年の海外調査として「地中海文化圏の社会と文化に関する学術調査」があげられている。この調査隊の計画は、西洋部の河野健二主任(当時)を代表として文部省に提出されたが、計画に関わっていた谷泰氏(元・人文研究教授)に「よく表現しなかつた。それにもかかわらず『要覧』などに毎掲載されたのは、申請実績を記録しようという意図がはたらいたためであろうか。(注2)ただし、このシボジムの総合討論において谷泰氏が述べていたように、エクスペディションに関わった人文研所員は、多数とはいえなかつたし、エクスペディションが共同研究を補つものと明確に主張していたわけでもない。以下の記述はあくまで、社会人類学部門の創設者の考えかたを避克的にたどつたものだと理解していただきたい。

(注3) 京都探検地理学会は、戦後、解散を余儀なくされたため、一部の学会員を中心に自然史学会が組織され、戦前の研究成果の公表が進められた。

文献

飯田卓二(二〇〇七)「昭和二〇年代の海外学術工カス(Expedition)——日本の人類学」の戦後とマスメディア「国立民族学博物館研究報告」三(二)：二七—八五

——「二〇〇」エクスペディション映画の系譜——二〇世紀前半の国産記録映画をふり返る「梅棹忠夫(監修)カラム／花嫁の峰チヨリザリザリザリ委員会(編)「カラム／花嫁の峰チヨリザリザリ」フィルムド科学のハイオテたち」京都大学学術出版会、二〇一三—一九九頁

今西錦司(一九七五)「一九七三」私の履歴書「今西錦司全集一〇」講談社、四二—四九三頁

今西錦司・梅棹忠夫(編)一九六八「アフリカ社会の研究——京都大学アフリカ学術調査隊報告」西村書店

梅棹忠夫(一九四三)「探検と地政学」『探検』四・一〇—一三三

——「一九九〇(一九五五)「氷河と沙漠のなかの衣食住」梅棹忠夫著作集四「中洋の国ぐに」中央公論社、一六九—一八二頁

——「一九九二」『野外調査法への序説』について「梅棹忠夫著作集一」知の技術「中央公論社、四九—四九八頁

——「一九九三」一九八八「人文でえたもの」梅棹忠夫著作集二「研究と経営」中央公論社、七五—〇八頁

江上波夫・加納一郎・樋口敬二・本多勝・梅棹忠夫(一九七二)「座談会 探検経営論」『朝日講座探検と冒険五』朝日新聞社、四三—四七七頁

木原均(編)一九五六「砂漠と氷河の探検」朝日新聞社

京都大学人文科学研究所(編)一九七九「人文科学研究所五〇年」京都大学人文科学研究所

——「一九九三」京都大学人文科学研究所要覧 第四号「京都大学人文科学研究所」

京都大学総合博物館(編)二〇〇二「フォト・ドキュメント 今西錦司」そのバイオ・ワークにせまる「紀伊國屋書店

土倉九三・梅棹忠夫(一九四三)「大興安嶺探検の技術面より——探検の平常主義と非常主義・合成主義と養成主義」『探検』三：一八—五五

中尾佐助(一九五六)「装備」木原均(編)「砂漠と氷河の探検」朝日新聞社、一八—一九三頁

藤岡喜愛(一九五七)「ながい眼でみよつ」『所報』五〇：一九—二二

水野清(二編)一九七〇「チャカラク・テハ——北部アフガニスタンにおける城塞遺跡の発掘」一九六四—一九六七「京都大学